

日本の面影

酪農家 吉川友二

去年の自転車日本一周の旅は、紀伊半島をぐるっと回った。伊勢神宮を参拝して熊野古道を歩いた。前の年までは日本海側を北上していたのだが、毎年雪に降られるので太平洋側にしたのだ。その時の神宮がよかったので、旅の終わりには雪の心配はあるが、次は出雲大社へ行くことに決めていた。

ところが今年（二〇二〇年）は、コロナの流行のために旅自体に行けるのか行けないのか、わからない状況になった。二月の後半からクロスカントリースキーの大会が中止になり、自転車の大会もすべて中止になった。毎年五月に酪農学園大学で行っている講義はリモート講義になった。ウエブ会議、ウエブセミナーなどに参加する機会もあり、縁のなかった情報通信技術を利用するようになった。長男の元（はじめ）は、高校三年間の努力の集大成である夏の陸上競技大会が無くなってしまった。私の仕事の酪農は、ほとんど影響がなかった。

十二月十七日に足寄を出て、萩・岩見空港から鳥取砂丘コナン空港までの道のりで、二十四日に帰ってくる旅の予定を立てていた。秋口にコロナの感染が落ち着いて始まったG・O・T・Oトラベルであるが、十二月の半ばには東京で感染が増加して、東京をG・O・T・Oトラベルから除外する、というニュースがあった。コロナの感染が少ない山陰地方に北海道から出かけることに躊躇して感染状況をギリギリまで見守っていたが、自転車の一人旅であるので、出かけることにした。

日本海側の雪であるが、十二月に入ってから記録的な大雪であった。太平洋側の足寄は雪がほとんど降らず、十二月の半ばだというのに、夜だけではあるがまだ放牧をしていた。こんなことは足寄に来て二十年になるが初めてである。旅の予定期間中の島根、鳥取の天気予報は

毎日が雪であった。飛行機のチケットをキャンセルして太平洋側にしようかと真剣に考えたが、旅が近づくにつれ予報はだんだん良いほうへ変わっていった。

あらかじめ行く予定をしていた所は、出雲大社と小泉八雲記念館の二つだけである。去年たまたま入った「南方熊楠記念館」の南方熊楠と小泉八雲になぜか昔から心を引かれる。たいして二人を知らないのに、二人は「真の自分」を生きたお手本のような気がするのだ。

八雲は『日本の面影』の中で松江を「神々の首都」と呼んで、松江の朝の様子を描写している。この松江の朝の様子が、八雲の愛した「日本と日本人」である。

「彼らは顔を太陽の方へ向け、柏手を四度打つてから拝んでいる。

長くて高い白い橋からも、同じように柏手を打つ音が聞こえてくる。また、新月のように反りあがった、軽やかな美しい船からも、あちらこちらから木霊のように柏手の音が響きあっている。その風変わりな船の上では、手足をむき出しにした漁師が立ったまま、黄金色の東の空に向かって首を垂れている。

柏手の音はどんどん増えていき、しまいには一斉に鳴り響く鋭い音が、ほとんどひっきりなしに続いて聞こえる。町人はみな、お日様、つまり光の女神であられる天照大御神を拝んでいるのである。」

「太陽の方角にしか柏手を打たない人もいるが、多くの

人は西の方角にある、日本最古の杵築大社（きずきおおやしろ）（明治四年まで、出雲大社は大社のある地名をとった杵築大社と呼ばれていた）の方へも向かって柏手を打つ。八百万の神の名を唱えながら、あらゆる方角に頭を下げる人も少なくない。」

私が松江市に着いたのは、走り始めてから五日目の十二月二十二日、私の誕生日である。小泉八雲記念館は松江城のお堀に沿った武家屋敷の並ぶ塩見縄手（しおみなわて）（塩見さんが住んでいた、縄のように細い道という意味）にある。小さな記念館ではあるが、お客さんは結構いた。

八雲と言えば、松江と想っていたが、松江には寒さを理由に一年三か月しか住んでいなかったことが意外であった。その後熊本に先生として三年、「神戸クロニクル社」の論説記者として二年間神戸に住んで、東京帝国大学の講師として東京で八年暮らしている。四十歳の時に日本に来て、五十四歳で亡くなっている。二十代三十代を過ぎたアメリカ時代は新聞記者として活躍をしていた。

一通り見学をして、二階に上がると階段の正面に書棚がある。そこでたまたま手に取った本のページをパラパラめくっていると、内村鑑三が英語で書いた『Japan and the Japanese』（日本語訳は『日本と日本人』）。この本は『The Representative Japanese』（日本語訳は『代表的日本人』）の元になった本である）について八

雲が書いた批評を見つけた。

内村鑑三の『代表的日本人』は、昨年の『噴煙』にユヴァル・ノア・ハリリの『21Lessons』を関西空港で買って、その本を千歳空港で落としたので、若松英輔の『内村鑑三』『代表的日本人』百分de名著』を電子書籍で買ったという話を書いた。それで気になって、八雲の書いた書評を読んでみた（『ラフカディオ・ハーン』の神戸クロニクル論説集』（恒文社）。

八雲はこの書評の中で「英語で書くならば、自分の考えを簡明、正確に表現すること」、「自分の思想を、外国の洋服を借りてきてそれに着せるようなことをせずに、考え、発言すること」が必要であると言い、「今日の日本を特徴づけている表現と思想の最悪の欠点」、「実際は文学で大業を果たす力を備えた国に、嘲笑を招くおそれのある欠陥作」と酷評している。

若松が書いているから内村鑑三の本も素晴らしいのだろうと、無批判に読んでいた。日本と日本人を愛した八雲は、日本の知識人たちの西洋からの借り物の表現と思想に対して厳しかったのだろう。

八雲は『日本の面影』『盆踊り』の中で、「そもそも、人間の感情とはいったい何であろうか。それは私にもわからないが、それが、私の人生よりもはるかに古い何かであることは感じる。感情とは、どこかの場所や時を特定するものではなく、この宇宙の太陽の下で、生きとし

生ける万物の喜びや悲しみに共振するものではないだろうか。」と書いている。「感情」が個人のものではなく、個人や時代を越えて共通するものであるという考えは面白い。

八雲は日本への出発前に書いたエッセイ「幽霊」『さまよえる魂のうた』（ちくま文庫）所収の中で、「漂泊の旅人は幽霊（ゴースト）のことをよく知っているようだ。：何かの目的や楽しみのために旅をするのではなく、ただひたすら己の存在に突き動かされて旅に出る人のことである。：その衝動が抗いきれないほど圧倒的で、しかも世俗的な欲望をもことごとく蹴散らしてしまうことに、本人も戸惑ってしまふのだ」と書いている。

八雲の言うゴーストとは自分の中に絶えず蠢（うごめ）いているなにかを指している。このゴーストも、感情と同じように、個人や時代を越えて共通のものと考えていたのだろう。

「真の自分」を生きたら、自分の中にある個人や時代を越えた「感情」と「ゴースト」に誠実に生きることであろう。

十二月十七日の朝、今シーズン最後の搾乳を終える。乳牛市場で売る牛一頭を家畜車に乗せてから旅にでる。

帯広からのミルクーライナー（新千歳空港までのリムジンバス）の中で、出雲大社に関する文庫本を読んでい

ると、出雲大社は日の昇る伊勢神宮と地理的に反対側の日の沈む場所が選ばれたと書いてあつて驚く。大国主命が国譲りをした場所だから大社が建てられたとのばかり思つていた。昇るお日様、沈むお日様は宗教そのものでもあり、また権力者にとつても重要だつたのだ。

十二月十八日

きのうは島根への接続便の飛行機がなくて、羽田空港に並んだ飛行機が窓から見える天空橋のホテルに泊まった。ホテルの料金はGOTトラベルで割り引かれ、お買い物クーポンまでもらつた。

萩・岩見空港について自転車を組み立てて、着換えをしてからビルの外に自転車を引いて出てみると、磯のにおいがしてくる。北海道からやってきてすぐのせいか、風を切つて走る風が一体寒いのか暖かいのかよくわからない。厚着をしたらよいのか、薄着をしたらよいのか。日本海の曇り空の下を走る。

岩見海浜公園でテントを張る。冬にキャンプ場をやつてくれている島根は偉大な県である。

十二月十九日

朝、走り始めてすぐに天気予報になかつた雨が降り出す。そのうち止むだろうと、雨宿りをしていると雨が強くなる。雨は強くなつたり弱くなつたりするが、止む気

配がないのでカッパを来て走り始める。

女子高生だろうか、傘を差した二人の子が横断歩道で信号待ちをしている。「おはよう」と元気に声をかけると、二人は驚いたが、笑顔で挨拶を返してくれる。今日は土曜日なので、これから部活へでも行くのだろうか？冬の雨の中、合羽を着て自転車で走っているオヤジをたまに思い出して、こんなアホも世の中にはいるんだと、二人の心を暖めてくれたらいいなと、冷たい雨の中を妄想しながら走る。

『ツーリングマップル』に「歴史国道石見銀山街道」と書かれた紫色の点線が地図を見るたびに気になつている。去年歩いた熊野古道のような道だろうか？道を左の海側に折れて温泉津（ゆのつ）の古い街並みを行くと、資料館がある。石見銀山街道について尋ねると、銀山街道のパンフレットを頂く。これは期待が持てそうだ。幸いにも雨も上がったので、銀山街道に行つてみることにする。

銀山街道を目指して、温泉津の海から山へと向かう。道は舗装道路が終わつて、砂利の歩道になる。自転車を押しながら坂道を歩いていくと、歩道から山道になる。そして両側が急斜面の沢に沿つた一人一人が歩くことがやつとの踏み跡になる。斜面が崩れて道がなくなつてるところがある。足が滑るのを踏ん張つて、重たい荷物を積んだ自転車をずり上げ、ずり上げ少しずつ進んでいく。

雨も降りだして合羽を脱ぐこともできない。引き返そうかと何度も思うが、この道を下る大変さを思うと、先へ進むしかない。

古戦場跡地という看板が立っている。両側が急斜面に囲まれていて、歩いて登るのも大変なこんな急坂で大勢の人々が殺し合いをしたなんて。

どうにか峠にたどり着く。そこには「降路坂（こうろざか）の茶店の跡地」の看板がある。一九四〇年代まで茶店があったそうだ。こんな山道が生活道路だったのだろうか？それとも観光客相手のお店であったのだろうか。

坂根口番所跡まで降りると、舗装道路になる。看板にこの道が石見銀山と温泉津を結ぶ主要街道であったと書かれているのを見て、こんな険しい山道が主要街道であったことに驚く。熊野古道のような整備された道を期待していたが、宗教道路と産業道路との違いだろうか？

濡れた衣服と荷物を乾かすために、大田市（おおだし）でホテルに泊まることにする。市街地に入る所に、世界遺産と日本遺産 国立公園のあるまちという立て看板がある。それぞれ「石見銀山遺跡とその文化的景観」、「石見神楽」、「大山隠岐国立公園」である。

二年前に牧場で働いてくれたカッキー青年が大田市出身なので、ラインをすると、大森町が生まれたという。今まさに通ってきた石見銀山の町である。カッキーの家の前を通ったかもしれない。

十二月二十日

今日も雨が降らないはずの天気予報なのに、走り出すとすぐに雨が降ってくる。駐車場の屋根の下で合羽を着て三瓶山（さんべさん）へ向かって登っていく。雨は止むどころか、雪に変わり激しくなってくる。三瓶山に近くなると、小さな噴水が一列に並んで、水を噴き出して道路の雪を融かしている。妻の実家のある富山県でも見たことがある。ここらあたりは水が豊富なのだろう。三瓶山山頂へ向かって道が右に折れたところで、融雪の噴水が無くなり、十五センチくらい雪が積もっている。まっすぐ行く道は出雲方面への下り道なのだが、こちらも除雪が入っていないので、もと来た道を延々と引き返す。

田儀（たぎ）で海の見える道に合流する。まさに冬の日本海といった風景が広がっている。風が強く幾重にも白波が立って岸に押し寄せている。

田儀で和菓子屋さんの看板を見つめる。あんこが大好きな私は、一休みをすることにする。あんこの入った和菓子を頼んで、隣のシューケースを見るとシュークリームの中のシュークリームが置いてある。なんだろうと思ってお店を見渡すと、シュークリームの皮がガラスのケースに積んである。頼まれてからクリームを中に入れて、パリパリの皮のシュークリームを楽しんでもらうのだそうだ。和菓子屋さんなのに頑張っている。当然シュークリームも頼んで店の外の小さな駐車場で和菓子を食べる。どこ

の町からも離れているはずなのに、お客さんが入れ替わりやってくる。おいしそうなお菓子がいっぱいあったので、お昼前なのにお菓子でお腹がいっぱいになってしまふ。

雨が降り始めて風も強くなる。日本海から吹き付ける雨風にあおられながら走る。この旅は東へ向って進んでいるので、偏西風の吹く冬の日本海では向かい風にならないことが助かる。

出雲大社に着くころには雨も風も止む。神門（しんもん）通りの商店街を自転車を引いて大社へと歩いていく。勢溜（せいだまり）の大鳥居から大社の境内が始まるのだが、神宮とは全く違って、厳かな雰囲気がるではない。大社は町の中に溶け込んでいる。本殿に向かつて下り坂の参道になっていて、この下り坂の参道は珍しいと思う。

水で手と口を清める手水舎（てみずしゃ）には、コロナのために柄杓（ひしゃく）が置いていない。参拝客はそれなりにいる。今年も新年のお参りを前倒しにして年末にできるようにしている神社もあるらしい。

出雲大社の拝礼は二礼、四拍手、一礼であることが見逃しそうな小さな古ぼけた立て札に書いてある。八雲の松江の朝の描写に出てくる通りの四拍手である。参拝が終ると雨が土砂降りになって少ししてまた止む。

出雲大社から出雲市内までは結構な距離がある。道の

すぐわきに川が流れている。流れが速くて深そうな川だ。こんな危険なしかも町中の川に柵がない。なんにでも柵をしてしまう日本で、柵がない。川を見ているだけでそのエネルギーに緊張を感じる。高瀬川という名前だ。濡れた衣服と荷物を乾かすために、出雲市街のホテルに泊まる。

十二月二十一日 月曜日

昨日の夜にお店で飲んだ日本酒の「出雲富士」が美味しかった。その酒蔵がホテルから歩いてすぐのところにあることを知って、酒蔵が開く時間まで、ホテルでゆっくりとする。

酒蔵に行くときまだ開店準備中であつたが、お女将さんが、相手をしてくれて、地元の農家を応援するために、出雲、島根の酒米を使っていることを説明してくれる。地元の農家とそれを応援してくれる酒蔵を応援するためにここでお土産を買う。

お米農家と酒蔵の関係、去年の和歌山の梅農家と梅干の製造会社との関係のように、食品製造業は、付加価値をつけることによつて地元の農業を守ることができる。それだけではなく、農家と加工をする人と人との関係が文化を生み出し、その地域に魅力が生まれる。足寄は放牧酪農があるが、牛乳からはチーズ、バター、お菓子まで製品のバラエティーが沢山ある。また放牧は魅力的な

景観を生み出すので、観光業にも期待ができる。人と人との結びつきを大切にすることで足寄の新しい文化が生まれるだろう。

お気に入りになった高瀬川の道を走って、出雲大社に再び詣でる。それから日御碕（ひのみさき）を目指して、大社から向い風となる西へ向かって海岸の断崖を走る道を行く。去年走った紀伊半島の一番西の端になる岬は日ノ御埼（ひのみさき）といい、同じ名前である。名前が同じというだけで、去年の旅と今年の旅が重なり合うような不思議な感覚だ。

地図のない時代、神宮と大社は大和王権時代の人々の心の空間で、どのように位置づけられていたのだろうか？そして土地の名前は、どこから生まれてきたのだろうか。道の上から下に突然立派な神社の屋根が現れる。地図で見ると日御碕神社である。本来、日の沈むところに神社を造ろうとしたら、大社はここになければならないだろう。でも、ここまでお参りに来るのは大変なので、出雲の神様は今の大社の場所に居てくださるのだろうか。

日御碕灯台から先は崖なので、海岸線に道はない。少し引き返して峠を越える。海岸線を行くと、今度は十六島鼻（うつぶるいばな）という岬がでてくる。この岬も崖で海沿いの道はなく峠道を越える。峠を下り始めると地図では海岸線にあるはずの道が見えない。この崖の下に道はあるのだろうか？この道をまた上り返したくはな

いので、不本意ながらもスマホを取り出して、グーグルマップで確認をしよう。

海岸線に出てからの道は案内板もなく、地図に目を凝らしても自分がどこにいるのかわからなくなる。道の両側の人家の塀にはさまれて、軽自動車一台がやっと通れるくらいの道になったり、家もない坂道の斜面に学校（廃校）が現れたり（多分平らなところは家がすであつたので学校を建てる土地は斜面にしかなかったのだろう）、隣同士の家の軒先が重なり合って、上から見下ろすとまるで鱗のように見える集落があったり（ここに住んでいる人たちはきつと火事にとても気を付けていると思う）、この人たちは崖と海にはさまれて暮らしている。道は海岸線の崖の上の少し平地になったところを走っていて、そしてところどころに海岸線に降りていく道がある。多分そこを降りていくと集落があるのだろう。どこをどう走ったのか？魚瀬（おのぜ）トンネル竣工記念公園という立派な看板のある公園がある。おじさんがパークゴルフ？を一人で練習している。退職をしてやることがないから、といかにも真面目に働いてきた感じがするおじさんである。ここでテントを張つたらいいよと言ってくれる。魚瀬の町にはお店があるかと聞くと、自動販売機しかないようだ。

魚瀬にも海岸へ降りていく細くて急な道がある。細い道を軽自動車とすれ違うと、いかにもオフィスの仕事帰

りといった身なりをした女性が運転をしている。この道の下には集落があるのだろう。ここから町の会社に通うのは大変ではないだろうか？

今日は全く距離が稼げなかった。

十二月二十二日

魚瀬（おのぜ）トンネルを抜けて、島根原発のある日本海岸に沿って行こうと思っていたが、道が通行止めである。日本海から峠を越えて宍道湖へ出ることにする。

今まで秘境を走っていたのに、宍道湖へ向って道を右に曲がるとすぐに、人家が道沿いに並んでいる。雨が降り始めて、車のない車庫で合羽を着させてもらう。神社があつて、お参りをしていると、ちょうど神主さんがせわしなくあらわれて、明かりをつけて、太鼓をたたきながら祝詞（のりと）を奏上し始める。いにしえからの変わらぬ時の流れを感じるところだが、「せわしなさそうに現れた神主さんはどこかの神社と掛け持ちでもしているのだろうか？」そんなことを考えてしまう。雨宿りもかねて、軒下で祝詞が終わるまで祝詞を聞かせてもらう。秋鹿（あいか）神社という。

秋鹿川に沿った道をしばらく下ると宍道湖に出る。一畑（いちばた）電車の秋鹿町駅（あいかまちえき…映画のロケ地になったことがある）はちょうど通学時間で、学生たちでにぎやかである。島根の秘境はこんなに町と

近かったとは。

宍道湖を眺めながら走りたかったが、二車線の道が狭くて通勤の時間帯で車通りが激しかったので、内陸側の道へ入る。サイクリングロードを見つける。小さな川に架かる橋に看板がある。この橋の名前は太兵衛（たへえ）橋という。この佐陀川（さだがわ）を掘削して宍道湖の水を日本海に流す工事を発案して成し遂げた（一七八五〜一七八八年）人の名前をとって地元の小学生在が名付けたのだそうだ。松江はしばしば宍道湖の水害で苦しんでいたのだそうだ。この掘削工事によって、目の前の佐陀川から向う側は松江を含めて本州から切り離されて大きな島になってしまった。松江が島だったとは！

松江城は平山城であり、三大湖城のひとつであるそうだ。城をめぐる堀川は宍道湖とつながっている。松江城は明治八年に、利用できる釘、鏝（かすがい）のための入札をして壊される予定だった。お城が壊されるところを、松江の元藩士の高城権八と出雲の豪商、勝部本右衛門（もとうえもん）が天守閣だけでも残してほしいと嘆願し、入札額を払って天守閣だけを残すことができたのだそうだ。武家屋敷、魯などはすべて取り壊されてしまった。

天守閣だけ奇跡的に生き残ったけれども、自分で自分の文化を破壊するなんて、アルカイダのバーミアンの石窟の仏像の破壊よりも理解ができない。八雲が内村など

の日本のインテリを批判する気持ちがかかる。

中海の大根島を通って、境水道大橋を渡ると境港市、鳥取県になる。水木しげるロードの看板が道路わきにある。少し遠いし、もう遅いしどうしようか迷うが、子供の頃にテレビの「ゲゲゲの鬼太郎」が大好きだった私は行ってみることにする。商店街の両側の歩道に妖怪たちの精巧な石像が並んでいて、圧倒させられる。まもなく夕暮れだというのに、家族連れやアベックなどが歩いている。今夜はどこに泊まるのだろうか。私も寝る場所を探さねばならない。

十二月二十三日

昨夜は境港市の「夢みなと公園」にテントを張った。朝テントをたたんで外に出ると、まだ暗く寒いのに、カメラを持ったお母さんがいる。「ダイヤモンド大山（だいでん）」を撮りにきたのだそうだ（大山は出雲富士とも呼ばれている）。でも今日はだめだとのこと。美保湾をはさんで大山が浮かんで見えるが、山頂には雲がかかっている。公園から弓ヶ浜の砂浜にサイクリングロードが走っている。今まで走った中で一番いいサイクリングロードである。

大山の雪のある所まで登っていかうかと大山に向かって曲がる道がある度に迷うが、鳥取までの距離を考えてその度にあきらめる。大山でスキーをするのはまたの機

会にしよう。

車通りの少ない道を選んで走っていると、「名探偵コナン」の女性キャラクターの等身大の像が立っている。鬼太郎の次はコナンである。コナンの作者の生まれた町に来たのだ。鳥取空港を鳥取砂丘コナン空港と呼ぶほどだから、コナンはよほど人気があるのだろうか。

倉吉という小倉・倉敷を連想させる名前にひかれて、内陸へ倉吉を目指していく。ちよつと登ると、なだらかな登り傾斜の斜面に美しい農村風景の雪景色が広がる。

倉吉の市街地に入って「三日月」

という食堂に入ると、ちよつとお昼



時間でお店は賑わっている。北海道から来ているという、お母さんに記念写真を撮っていただき、おやつまでいただく。「三日月」から歩いてすぐに倉吉の観光スポットである。玉川沿いの赤い石州瓦（せきしゅうがわら）の屋根の白壁土蔵群がある。石州瓦は日本三大瓦の一つである。一昨年津和野へ上っていく道沿いの家々の瓦がみんなオレンジ色で統一されて美しかったが、それも石州瓦であったのだ。

倉吉街道を東郷池へ。東郷池の次には、鳥取の市街の

手前にこれもまた大きな湖山池（こやまいけ）がある。池と名前が付く日本で最大の池だそう。海跡湖と言い、海の湾が砂の堆積で海と別れてできたのだそう。

旅の最後まで面白い地形で楽しませてくれる。

十二月二十四日

リムジンバスのホームがある鳥取駅の北口に向かうと、雪が十センチ以上まだ残っている。飛行機を羽田で乗り継いで、夕暮れ時に新千歳空港に降り立つと、茶色の景色にびっくりする。雪が全くないのだ。新千歳空港は雪の降らないところを慎重に選んで作ったのだろう。

鳥取の雪景色の後に見る北海道の茶色い風景が、かえって目にまぶしく感じられる。

風と共に去りぬ

私の母はがんで自宅療養中であつたが、二〇二〇年四月十七日に自宅で転んで大腿骨を骨折して入院をした。骨折の治療に専念して、がんの治療薬を一時中止した。

コロナのために病院へ行っても会うことができないのでiPadを買ってプレゼントをした。今まで元気な時に、何度もタブレットをプレゼントするから、家族でラインをしようと言っていたけれども、「そんなものは私にはつかえない」と、かたくなに拒んでいた。プレゼン

トをしたら、かえってストレスになるかと思つて、今までタブレットをプレゼントすることを控えていた。

家族でラインのグループを作れば、私たちが毎日何をしているのかもわかるし、孫の写真や動画を見ることができる。孫たちともメッセージのやり取りができる。母に何も言わずにiPadを送り付けた。母に怒られるかと思つたが、喜んでくれた。私はほぼ毎日のように牧場の写真や動画を送つた。看護師さんたちが使い方を教えてくれるようで、私の送つた牧場の写真を見せて看護師さんたちに自慢をしているようだ。

牧場よりも友二の顔が見たいということなどで、私も初めてだつたけれども、看護師さんに手伝ってもらつて、ラインでビデオ通話をした。照れ臭かつたので、短い時間だつたけれども。

九月一日に母はがん病棟から、同じ病院に新しくできた緩和ケア病棟に移動した。母は延命治療をしないことを選択したのだ。

緩和ケア病棟に移つたので、会うことが可能であろうと、お見舞いに行くことにする。ラインの中の母の動画をみると元気そうである。本間隆さんが亡くなったときには、一緒にチーズ工房を見学することを先延ばしにしたために、共に時間を過ごす大切な機会を逃してしまつた経験がある。会いたいと思つた時に会いに行く、というのが教訓になった。虫の知らせとでもいうのだろうか。

長男の元（はじめ）と二人で行くことにする。元は高校三年間、陸上部の練習で長期休みも家に帰ってくることもなく、私の母に会うのは三年振りである。母にとつては元は初めての孫のようなもので、一番思い出が多く、また深い孫である。

九月十日に元と二人でお見舞いに出かけた。上田の実家に帰って、家においてあったコミュニティ新聞を読むと、新しくできた緩和ケア病棟についての記事があった。この病棟を作るために、クラウドファンディングなどの寄付を募り、三千万円集まってこの病棟はできたのだそう。ありがたいことだ。

翌十一日、兄に案内をしてもらって、母に会いに行った。足寄を出るときには肌寒かったのが、今日の上田は三十四度の暑さである。私にとってはまた夏が帰ってきたようでうれしい。

母の病室へ行く途中に病棟ですれ違って挨拶をした女性の職員の方に、「間に合ってよかった」と言われた。ラインの動画ではあんなに元気そうなのに、そんなに危ないのだろうか。医師から説明を受けている兄からも母はまだ大丈夫であると聞いていた。

突然現れた私を見ると母は、「来るな」と繰り返す。目が真剣に怒っているので面食らってしまう。意識がおかしいのだろうか。私のことをいつも心配してくれている母は、仕事を休んでまで「来てはいけない、なんで来

たのか」という意味で「来るな」と言っている。母が落ち着くまでの間、元と挨拶もできないでいる。

病院の母の枕元で『風と共に去りぬ』を読んで聞かせてやろうと、母の本を病院へ持ってきていた。母が『風と共に去りぬ』を繰り返し読んでいるのを、私は子供の時から見ていた。『風と共に去りぬ』はあまりにも有名なので、私はこの本はきつとみんなが喜ぶような主人公が、みんなが喜ぶストーリーを生きるお話だろうと思いついて今まで読むことはなかった。

母の本は昭和三十三年十二月二十日第四刷発行で、旧漢字で小さな活字の三段組で二巻本である。河出書房新社 世界文学全集 二十一、二十二巻、各巻定価三百八十五円、地方定価三百九十円である。母は昭和十二年生まれなので、母が二十一歳の時、会社勤めをしていた時に買ったのだろうか。

若い時の母は、少年の私から見ても情熱的な人であった。母は高校時代にバスケットボールで日本一を目指していた。当時の全国大会は社会人も含めての大会であったので、高校のチームが日本一になるために、どれほどの厳しい練習をしたことだろうか。「内職仕事をしているときに、卓球を始めて練習をして全国大会を目指すことを考えると、手に汗がにじんでくる」と、小さかった私に言ったことが心に深く残っている。

そんな母であったが、私が大人になると、母がなんで

こんな人に遠慮をしてやりたいことをやらないのだろうか？人の心配ばかりしているのだろうか？しばしば思った。例えば私が子供の時から敬愛していた包代（ふさよ）さん（母の姉）が亡くなられたときも、私が仕事を休んでお葬式に来るのが分かつていたので、連絡をもらえなかったことがあった。

母は少しすると落ち着いて、兄が母にお昼ご飯を少しずつ食べさせてあげて、一緒にお昼ご飯を食べる。母に『風と共に去りぬ』を読んであげようかというとき、「何回も読んで覚えちまつてるから、読まなくてもいいわい」と少しおどけた調子で言う。母が眠ってから枕元で読んであげよう。

翌日の十二日、母のお見舞いに行くと、母は「連れてけ」、「連れてけ」と興奮をして何度も繰り返し私に向かって訴える。足寄の牧場に連れて行けということだろう。母の鬼気迫る訴えに、私はどう対応したらよいのか、おどおどしてしまう。

亡き父と母と私たち家族で牧場で過ごした楽しい思い出を母も思い出しているのだろう。こんなになる前に早く足寄に連れて帰って、孫たちと一緒に暮らさせてやりたかったと思う。

看護士さんが来てくれて、ようやく母は平静に戻った。「来るな」、「連れてけ」という母の強い思いに感情がゆさぶられる。

別れるときにはお互いに別れを惜しんで、飛行機に合うギリギリの時間まで母と一緒にいた。「今度は笑里（えみり、次女）と一緒に来るから」と言つて母と別れる。

足寄に帰ってから、『風と共に去りぬ』を読んだ。勝手に思いこんでいた物語と全く違っていた。まず驚いたのは、スカーレットが登場するときの年齢が十六歳であり、アメリカ南北戦争当時の南部では十六歳は大人の扱いをされていること。そしてスカーレットの性格はというと、すべての男たちの気を引かなければ気が済まない、怒ったら花瓶を投げつけて粉々にする、子供が生まれたら子供なんていなければよいと思う、お金のため（故郷の農場を守るため）に男をだまして結婚、結婚したら旦那の意見には耳を貸さない。一言でいうと悪女である。

母はこんなスカーレットのどこに共感をしていたのでろうか。虚栄心が強く、自分の行動を内省することがない。薄っぺらな性格と言つてもいいかもしれない。しかし、人の目など気にしないで、本音で行動をする。人の目から見ても正しい行動をする人が多い社会の中でスカーレットの強さは特別である。

スカーレットは悪いことがあつても「今考えるのはよそう。明日考えよう。明日は明日の陽がてるのだ」が口癖で常に前向きである。

母が生きているうちに読んでいけば、母と『風と共に去りぬ』について話し合えたのに。この本のどこに母はひかれたのだろうか。一緒にアメリカ南部を旅したかった。

母と別れた次の朝の九月十三日の朝日新聞の「折々のことば一九三四 鷺田清一」を兄が写真にとってラインで送ってくれた。

のぞみはありませんが
ひかりはあります

新幹線の駅員さんの言葉

臨床心理士・河合隼雄さんが残したジョーク。河合さんが駅員さんにこう言われた。言葉の深い含意に感激し、同じ言葉を駅員に返すと、駅員は「あつ、『こだま』が帰ってきた」とつぶやいた。

十四日。お昼ご飯のフルーツを完食したこと。母の愛読書であった『新・平家物語』を朗読本で聴いてみたいと言っていること。午後は入浴をする予定であるから、母の体調は思った以上に良いのだろう。と、そんなラインが兄から届いた。

一七・五八 兄からライン電話で母が亡くなったとい

う連絡が来た。

突然の母の死である。今にして母の気持ち进行うと、別れる時に「笑里とまた来る」などと言わないでなければよかつたという後悔もある。

足寄の知り合いでも、毎年『噴煙』に寄稿してくれていた石田統敏さん、床屋の五十嵐さんが亡くなられた。尺八を教えてくださいと尺八をお借りしたままです。亡くなってしまうから後悔をするのではなく、一緒にいる時間を大切にしたい。

去年の『噴煙』では、瞑想と書いたけれども、心の内側と外側は呼応している。「感情」「ゴースト」などと大袈裟なことを言っていないでスカーレットのように行動をすればよい。スカーレットは行動をすることによって、個人や時代を越えて、私の母を含めた多くの人の心の中で生きている。母のバトンを受け取りたい。